
.hack//G.U. Another World

空野翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack / / G・U・Another World

【Nコード】

N9098H

【作者名】

空野翔

【あらすじ】

西暦2010年、決して公にならない事件が解決した。それから7年後、三崎亮という17歳の少年がそのネットゲームにログインした。実は亮にはとある秘密があり……。これはhack / / G・Uのメインストーリーに沿いながら捏造を盛り込んだ話となっています。

予兆

それは我執から生まれた。

生に対する執着、死に対する恐怖。

死すべき存在が生に取り付かれ、世界に絶望した少女を捕らえた。

闇へと葬られた歴史。

影から影へと伝わる物語。

隠匿された、黄昏の碑文。

そして生まれた黄昏の女神。

女神を狩る死神に囚われしは、地母神の怒りに触れた少年。

ああ、少年に幸いあれ！

死神から解放された少年は、あまりのショックで女神にまつわることを忘れてしまった。

その7年の後に、忘れられし記憶にまつわる事件が起こるなどとは思わずに……。

地母神に魂を囚われ、死神とされて帰還した少年に待ち受けていたものは好奇の目。

神の怒りに触れ、神隠しに合った少年。

異界の空気を吸ってしまい、少年が感じたものは空虚。

研究者達は珍しい“サンプル”を手に入れ、嬉々としてメスを握った……握ろうとした。

しかし……歓喜の叫びは落胆へと変わる。

少年にサンプルの価値がなくなってしまった。
自分の身に何があったのか忘れてしまっていた。

これでは何があったのか分からない。

少年が異界へと接していた道具は、何も知らない少年の両親によつてすでに棄てられ今はない。

サンプルの意味が無くなった少年は、何も知らされないまま日常へと戻っていった。

少年が嘲笑ったことに気付かぬまま。

神をも恐れぬその行為！

少年は神隠しにあったことを覚えていた！

地母神に囚われ、魂を変質させられ、死神となったことも！

何かを得るためには代償を支払う。

黄昏の鍵を手に入れようとした少年が支払ったのは、自分自身。

しかし黄昏の鍵は手中に叶わず。

それは死神の代償だろうか。

それは地母神からの罰だろうか。

そして待ち受ける好奇の目。

力なき少年は『己』を探すため、己を偽ることにした。

全ては空虚を埋めるため。

全ては見失ったものを探すため。

存在しないはずの彼が再び世界に現れた。

死神に囚われた世界、嘘偽りに満ちた世界に。

そして彼は世界をまたさ迷いだす。

偽の中の真を探すため、自身も偽を纏い。

ただし、わずかな例外にはほんのかすかな真を告げ。

世界が炎に包まれるまで。

オレハココニイル

.

予兆（後書き）

初めまして。初投稿となります、以後お見知りおきを。

コメント大歓迎ですが、作者が何分口下手なもので、そっけなくともご勘弁を。

まずはプロローグです。

初めてということを手探りの状態だったんですが……分かる人には分かってしまう内容ですよ。もちろんそのつもりで書いたんです。

それでは、次出会えることを祈って。

第1話

The World R:2

その日、また新しい来訪者が“世界”に足を踏み入れた。

黒い装束に銀の髪、紅の瞳。

マルチウエボン
職業は錬装士。

名前は……ハセヲ。

閉じていた目を開く。

とたんに飛び込んできたのは少し暗いドームの中。

飛び交う会話に目が回りそうになる。

やはり多いのはパーティメンバーの募集。

ハセヲはこの『世界』での感触を確かめるかのように左手首を振った。

もちろんこれは入力された動作で、ハセヲのリアルには何の感覚もないのだけれど。

2017年になり、科学は大幅に進歩した。

リニアモーターカーも試運転間近だし、民間人宇宙飛行者ももうす

く誕生しようとしている。

その中でこのThe Worldに存在するプレイヤーはとてもリアルだ。

CGアクターが存在する現在、目の前の人とてもポリゴンだとは思えない。

しかしそこに宿る精神というものがあるはずはなく、どこか虚ろな印象さえ与えた。

その中で、ハセヲは笑みを浮かべる。

久しく唱えていなかった名。

とある母から生まれた肉体なき存在。

「

」

その名はテキストに変換されることはなかった。

さあ、新しい人生の幕開けだ！

時は巡る。

生まれたばかりの赤ん坊は今や立派なレディ。

8本の鎖は千切れ、今やネットの海の中。

世界が変わっても伝わる伝説。

女神、そして黄昏の鍵。

「ない」ものを探す風変わりなギルド。

この『作られた』世界で『神々』が作らなかったアイテムが存在するはずがない！

そう、これはまだ序章に過ぎない。

言っならば嵐の前の静けさ。

「ククク……」

自然と喉が震える。

これは狸の化かしあい。

腹を探り、騙し、裏をかき、裏切り、目的の方へ導く。

昔から何度もやって来たことだ、それについて今更何も思わない。

ただ、今回の相手は大きい。

古い友人にして、あの楽園を出て行った改造屋^{チーター}。
左腕を拘束し、何かを隠している。

恐らくは黄昏^{キー・オブ・ザ・トワイライト}の鍵に関するもの。

さあ、掌で踊っているのは誰か？

「僕だって、まだ舞台から降りたわけじゃないもんねw」

仲間外れだなんて許さない。

「僕を忘れてたことを後悔させたげるよ、オーヴァン」

子供っぽい口調に紛れているか、漂わせているのは殺気。

魔術師の人形劇が始まろうとしていた。

ならば、その人形劇を引つ掻き回すのみ。

△隠されし 禁断の 聖域
グリーンマ・レーヴ大聖堂

ハセヲの姿は今や初めてログインした時とはまったく違う。

ジョブエクステンド。

マルチウエボン
錬装士のみが許された、武器を使い分ける職業。
ジョブ
今やハセヲはレベル133の魔人、知らぬ者はいないPKK『死の恐怖』。

人を寄せ付けない刺々しい鎧に、ディスプレイ越しにでも伝わりそ

うな圧倒的な存在感。

それをひとことと言っなら……狂気。

誰にも理解されない茨の道。

いや、理解されることを拒否する道。

ハセヲが体験したことは常識には当てはまらないもの、世界を敵に回すこと。

誰もネットゲームが原因で意識不明になるとは思わない。
どうせ過労とカルテに書いてそれでお終い。本当の原因は分からないまま。

だからハセヲは理由を探すためにネットゲームをさ迷う。

伝説のPK三爪痕トライエッジを探すため。

「どこだ！三爪痕！」
トライエッジ

半年ぶりに出会ったかつて所属していたギルドのマスター。

ハセヲは彼のことを信頼していた。

たとえ本人が変わり者だとしても。

ハセヲの大切な人が消えたときにいなかったとしても。

ハセヲが彼を疑うわけがない。

だから、ハセヲはここに来た。

ハセヲの大切な人をPKし、リアル現実で意識不明にした張本人。

トライエッジ三爪痕を見つけ、大切な人を取り戻すために。

まるでハセヲの叫びに応えるかのように、聖堂の祭壇に蒼い炎が生まれた……。

第1話（後書き）

大分すっ飛ばしました。

Rootsを書くこうかとも思ったのですが、あの辺りはほぼ同じなので捏造が入るG・U・本編から本格的に書くこうと思っています。

まずは序盤、ハセヲがデータドレインを受けるまで。

次からはレベル1になってますね。

こう見るとかなり無茶かもしれませんが……。分かりにくいのは承知の上です。

あえてばかしたところもあります。

コメントを下さった方、この場でお礼を述べさせていただきます。

第2話

三崎亮。

都内に両親と3人暮らしで住み、有名進学校に通う高校2年生。

父親は有名会社の部長を勤め、何1つ不自由ない生活を送っている。両親が共働きのためほとんど家に1人。

学校の成績は優秀だが、最近は下降気味。でもボーダーラインは保っている。

部活は剣道部に所属しているが幽霊部員。まともに練習もしないため実力は未知数。

ルックスまあ平均以上で才色兼備、文武両道。苦手なものは見当たらない。

性格に難ありというわけではないのだが、友達は少ないというのが難点と言えば難点だろうか。

幼い頃は体が弱く、何度か入院を繰り返していた。しかし2年前を最後に入院はしなくなり、現在は定期的な通院に留めている。最近はそのとは別にとある患者の見舞いのために毎日病院に通っている。

それが、CC社の調べた三崎亮のざっとしたプロフィール。

すぐに夢だと分かってしまう暗い場所。
ハセヲはそこに佇んでいた。

『ミツケタ……』

暗がりの中に赤い点が3つ浮かぶ。

現れたのは死神。

生者を死へと導く存在。

「俺を、殺すのか？」

ハセヲがそう訊くと、死神は笑ったような気がした。
顔なんて3つの赤い目しかないのに。

すると、死神が縮んだ。

見上げるほどに大きかった死神が、今ではハセヲと同じくらいの身長にまで縮んでいる。

姿形が変わった死神。

それを見てハセヲは息を呑んだ。

『俺は、お前だ』

死神が手を伸ばす。

ハセヲは動けない。

人肌の温もりがハセヲの顎を撫でる。

『やっと届いた……』

その姿はまるで……。

はつとして三崎亮は顔を上げた。

「俺は……？」

記憶があやふやだ。

時計を見てから、カーテンから差し込む光を確認する。

午前6時。

まずは寝オチしたのかと思った。

不規則な生活の上に口クな食事も取っていない。両親が出張でい
い今、食事はコンビニ弁当とカップ麺で済ませることが多い。もち
ろん健康に悪いのは承知の上。

それからだんだんと昨夜のことを思い出す。

あの人そっくりなPCと出会い、それからかつてのギルドマスター
からのショートメールを受け取り……。

「……そうだ」

まだぼんやりする頭でいつの間にか電源の落ちたM2Dを起動させる。

慣れた手つきでパスワードとIDを入力した。

すると、まず最初に目に飛び込んできたのは『初期化完了しました』という文字。

「……はあ？」

思わず間抜けな声を出してしまう。
初期化なんて操作をするはずがない。

ようやく頭が覚醒してくる。

「……そうだ、メール！メンバーアドレス！」

嫌な予感は的中するもの。

メールもメンバーアドレスも空っぽだった。
もちろん大切なメールも消えている。

「そんな……」

唇を噛み締め、亮はデスクトップに戻った。
そこからThe Worldを選択。

そしてログイン。

鎖に繋がれていた死神が解き放たれた。

第2話（後書き）

まだまだ序盤ですね……。こんなペースでいいのやら。

ちなみに剣道部という設定は設定資料集からです。

正式に採用されていたのかどうかは分かりませんが、一応公式です。それに、どこかのドラマCDで告白されて困ってるっていうようなことを漏らしたような気が……。あれ？勘違いでしたっけ……？間違っても、どうか暖かい目で見逃してください。

第3話

確かに今のハセヲはレベル1だ。初心者と間違えられても仕方ない。仕方ないとはいえ……納得できるかどうかは別。

△麗なる 先導の 巣立ち

どうしてこうなったのか、すでにハセヲに考える気力は無かった。

オーヴァンらしき人がいたというPC同士の会話を聞き、ひたすらマク・アヌを進んだ。

しかし見失い……とある獣人PCとぶつかったのだ。

とにかく適当に相槌を打ちながら、モンスターを倒していく。

「飲み込みが早いじゃん！この調子で行こう！」

「すごいんだぞ、ハセヲ。このままじゃ、すぐに追い抜かされちゃいそうだな」

ギルド『カナード』

初心者サポートを目的として設立されたこのギルドメンバーに、ハ

セヲは初心者と間違えられたのだ。
そりゃあもう、何度否定してもこの2人は聞き入れない。

斬刀士のシラバスと魔導士のガスパー。

ギルドと言ってもメンバーはこの2人だけしかいなく、弱小もいいところだ。

2人のレベルも今のハセヲより少しましという程度。

それでも、今のハセヲよりレベルが高いことは確か。

今は大人しく、少しでもレベルを上げることに専念すべき。

そうでなければ、あいつに勝てない。

回式・芥骨を持ったのも実に8ヶ月ぶりだろうか。

「ねえ、ハセヲはどう思う？」

急に話を振られ、思い切りハセヲはシラバスを睨みつけた。

「何がだ」

「だから、PKのことだよお」

「僕達弱いから、いつも逃煙玉を持ち歩いてるんだけど……」

弱い奴は弱いなりに逃げる手段を持っているということらしい。

「あつ、そつかあつ！ハセヲ持っていないんだあ」

「そうだね！じゃあ、これ渡しとくよ」

シラバスから平癒の水と逃煙玉を押し付けられた。

「……貰つとく」

今は回復アイテムも貴重品だ。大人しく貰っておく。

「とにかく、PKに会ったら逃げる！相手はレベルが高いからね、敵いっこないもん」

「中にはあ、カオティックPKっていつて、賞金がかかったPKも

いるんだぞ。全部で7人いるんだけど、全員すつごく強いんだあ」

「賞金を手に入れるためにはクエストをクリアする必要があるんだけど……まだ適正レベルまで遠いね」

苦笑するシラバス。

「でも、カオティックPKじゃなくても強い人は強いからね。あの『死の恐怖』とか……」

その当人が目の前にいることをシラバスとガスパーは知らない。

「『赤い稲妻』って人とかあ……」

ガスパーがその名前を言ったとたん、ハセヲは内心で舌打ちした。

「あと……『黒い……』……なんだっけ？」

「どうでもいいだろ。さつさと奥へ行こうぜ」

無駄話に付き合う暇はない。

この苛立ちを次に見つけたモンスターで晴らすと決めた。

第3話（後書き）

お久しぶりです。待っていてくださる方がいればいいのですが……。シラバスとガスパー登場です。次回にはあの人達も。

このペースで行くと、完結するのはいつになるのやら。

第4話

獣神殿の宝箱をハセヲが開けようとしてい、背後から気配がした。

「久しぶりだねえ、ハセヲくん♪」

嘲るような声。

見なくても覚えてる、ボルドーとネギ丸、グリンの3人だ。

「こいつら……ケストレルだ!」

「え?え?なんなのこの人たち?!」

「PKだよ有名な!」

ハセヲの横でシラバスとガスパーが言い合う。

「しばらく見ないうちに、ずいぶんしょぼくれちゃったのねえ?」
『死の恐怖』サマだと気付くのに、時間がかっちゃったわよおw」
ボルドーが嘲る。

「ええっ!?本物?」

「ホントーにホントーの『死の恐怖』?」

驚いて2人がまじまじとハセヲを見た。

「……だから、言っただろうが」

ハセヲは溜め息をついた。

何度も言った。その度に笑われたが。

「こんなところで出会うなんて、スッゴイ偶然♪　もしかして、私
たちって赤い糸で繋がってる?」

「はっ、そんなのこっちから願下げw」

「こっちもだよバーカ!とりあえず……スタスタに愛してあげる!」
ボルドーが刀を抜いた。

ディスプレイ越しにでも分かる剥き出しの感情……殺気。
その殺気こそハセヲを“ハセヲ”たらしめるもの。

肌で感情を感じるのが楽しくて嬉しくてたまらない。

もっと もっと

その剥き出しの感情を味わらせてくれ……！

「ななな、なんだかよく分からないけど……。乱暴なことはやめ——」

頭を抱ええ、無謀にもガスパーはボルドーを止めようとした。

それに容赦なくボルドーは刀を振る。

「あひゃあつ！」

「ガスパー！」

1撃でガスパーのHPが0になる。悲鳴を上げたシラバスが、慌てて黄泉返りの薬を使った。

その光景にハセヲがはっとする。

なぜかその光景が気に食わない。

どうしてだ？

無関係な奴らを手にかけたボルドーが許せないからだ。

許せないならどうする？

相手の方がレベルは20以上も上。勝ち目はない。

逃げようにも、タウンに戻るためのカオスゲートはボルドー達の後ろ。導きの羽を使用する暇を与えてくれるとは思えない。

それなら、迷うことはない。

HPが0になるのが怖い？
負けるのが怖い？

そんなもの、ゲームの世界で与えられた擬似的な『死』に他ならない。
たかがゲーム、死んだっていい。

死ぬよりも怖いもの――。

大切な人を守れないこと。

逃げるよりは死を選ぶ。

違う、

死を与えるのだ。

俺は、『死の恐怖』

『死』を与えるために産まれた――。

“ハセヲ”の意志に従い回式・芥骨が具現する。

レベル1用の、最弱の双剣。

「はっ、やろうつてのか？」

貧弱な装備を見て、ボルドー達が嘲る。

馬鹿にして見ている。

今すぐその首を刎ね脊髄を啜り脳を喰らってやる。

“ハセヲ”が晒う。

さあ、俺の意思に従え！

事象を具現化させろ！

必要なのは意思——純粹な感情。

相手を殺すという、一途な殺気。

それが死への第1歩。

狂気へ身を落とせ！

狂って狂って狂って狂って狂って——！

その瞬間“ハセヲ”はこの世界に現れる。

ここはゲームではない、“現実”だ。

さあ、相手に本物の死を……！

「そこまでよ」

望まぬ第三者の声が割り込んだ。

第4話（後書き）

ボルドー姉さん登場。ネギ丸、グリンのセリフがありません。
さて、次の投稿はいつになることやら……。1ヶ月に1回を目指しています。

第5話

ゆらり、と。

蛇が鎌首を持ち上げるように。

『ミ・ツ・ケ・タ……』

捕らえた。

この7年間手を伸ばしても届かなかった存在に。

そもそも自我が形成されたのもここ最近のこと。
産声を上げてても存在を無視され、見えない壁に阻まれ。

その壁が壊れた。

壊された。

無意識の中で形成されていた壁が何者かの手によって壊された。

好機。

今や“彼”はこの手の中に……。

「そこまでよ」

第三者の声で、ハセヲは我を取り戻した。

今、自分は何をしようとしていた？

簡単なこと、このケストレルの連中に死を……。

そうだ、俺は何を檻から出そうとしていた！？

あれは表に出してはいけないもの。

内に潜むはどんな生物でもまず最初に求めるもの……生への渴望と対極にあるもの。

2年も前に喪っていた死神。

（捕まった……？）

考えるだけで身震いがする。

耳鳴りがする。

忌まわしい八長調う音。

（どうして……！？）

M2Dを外し、周囲を見回す。
見慣れた、自分の部屋だ。

他に誰もいない。

本当に……？

動悸が激しい。

「う、あ……」

その声はマイクに拾われることがなかった。

嫌でも昔のことがフラッシュバックする。

「俺は……ここにいる……？」

「ハセヲ……大丈夫？」

うずくまっているハセヲをシラバスが支える。

「……ああ」

ハセヲは1度頭を振り、意識を覚醒させようとした。

「助けてくれて、ありがとうなんだな」

露出の高い闘拳士にガスパーが礼を言った。

「アンタがハセヲね？」

女性がハセヲを見下ろす。

視線が気に食わない。

力の入らない体を叱咤し、ハセヲは立ち上がった。

「あんたみたいな奴に名乗った覚えはないんだけど？」

「へえ……噂通りのきかん坊って感じね」

「何、アンタ俺のファン？w」

「残念ながら、ガキは趣味じゃないの」

「あつそ。そりゃよかった。俺もオバサンには興味ない」

「オ、オバ……」

すると分かりやすいほどあからさまに反応する。

「『きかん坊』とか『趣味じゃない』とか、言い回しがどつかオバサン臭い……w」

「失礼ね！こう見えても私は……！」

「私は？w」

「……………」

沈黙。

「……………出直した方がよさそうね」

女性が踵を返す。

「ご勝手に」

「ひとつだけ忠告しておくわ」

まっすぐ女性はハセヲを見る。

「ハセヲ……………あなたのPCには『危険な力』が秘められている」

「『危険な力』……………」

「自分のPCから巨大な『何か』が生まれるような感覚を覚えたことはない？」

その言葉に反応するかのように、内側でずくりと『何か』が蠢く。

「……………まあいいわ。じゃ、また会いましょう」

今度こそ女性はダンジョンから転送されていった。

第5話（後書き）

遅くなって申し訳ないです。

とりあえずパイのシーンだけでも終わらせたかったので……。
続きはまた次回。

第6話

「どうして俺だと分かったんだ？」

志乃と同型のPCが振り向いた。

「だって、ハセヲさんはハセヲさんじゃないですか」

その言葉は人知れずハセヲの胸を抉った。

『ああ、もう少しだったのになあ……』

その、ひどく残念そうな声に心臓が高鳴る。

（黙れ……）

『どうして黙る必要があるんだ？ テメエだって望んでるんだろ、力を！』

（お前は……）

『認める。テメエの奥底に潜む狂気を！』

俺はお前だ！お前の狂気は俺の狂気！あの人を斬り裂いた快感を！あの興奮を！忘れたわけじゃないだろ！？

何今更怖気づいてんだよ！その手でいつたい何人殺してきた！？』

「黙れ！」

思わず亮は大声で叫んでしまった。

「るせーんだよ黙れってんだ！ああそうさ俺は忘れてねえあの興奮を！」

魔神となつて手にした鎌でPK達を屠つたあの快感を。

安っぽいグラフィティを切り裂いても手応えがなくてつまないけれど、それでも相手に“死”を与えたという興奮を。

「でもな、これは俺の狂気だ！突然出てきたテメーの感情じゃねー！」

『……馬鹿かw』

笑い声が耳の奥で響く。

『お前は俺だ。お前の感情は俺のもの。俺の感情は俺のもの。お前の狂気が俺を育てた。そして俺は暴れ足りねーんだよ。』

なあ、なんで狂気を抑える！？こんなに暴れたいのに、どうしてそれを抑制するんだ！？昔のテメーはあんなに狂気に忠実だったじゃねーか！』

「あれは楚良だ！ハセヲじゃねーんだよ！ハセヲは楚良じゃない！」

楚良^{ハセヲ}は楚良^{ハセヲ}に成りえない。
亮^{ハセヲ}が楚良^{ハセヲ}に、亮^{ハセヲ}がハセヲに成ることはあってもハセヲは楚良にはならない。

それが、『ハセヲ』を作ったときに決めたルール。

「この感情は楚良のもの！ ハセヲじゃない！」
『この狂気は楚良のものであり、ハセヲのものであり、亮のものであり、俺のもんだ！ 俺は亮、俺はハセヲ、俺は楚良！ ヒヤハハハハハハハハ！』

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！！」

亮が何度叫んでも笑い声は耳の奥にこびりつく。

「俺は俺だ！ 俺は……！」

叫びは悲鳴。

『三崎亮って何なんだ？ テメエも、俺もひっくるめて三崎亮だぜ？』

「俺は……！」

ハセヲさんは ハセヲさんじゃないですか

「俺は……！」

俺ハココニイル？

第6話（後書き）

ハセヲ「三崎亮のはずなのに、それが分からない。

ハセヲはハセヲ、なら“俺”は誰？

……ちょっと病んでますね。

第7話

狂気が足りない。

志乃を助けられない――

もっと狂わないと。

本当に？

志乃を助けるために狂うの？

――狂うんじゃない。もう狂ってるんだよ――

テメエは本性を出すために志乃を言い訳にしてるんだ

赤い3つ目が迫る。

亮は飛び起きた。

気持ち悪い。

寝汗でシャツまでもぐっしりと濡れている。

「くそっ……」

舌打ちをし、亮は階下のダイニングに下りた。

当然ながら誰もいない。

いつの頃からだろうか、この家に自分1人しかいなかったのは。

朝も、昼も、夜も、この家には亮1人。

学校の成績さえ下がらなければ、亮を咎める人物はいない――。

ケータイが振動する。

双剣士「楚^ソ良」

それは過去の亡霊の名前。

死神の依り代となり、『世界』をさ迷った亡霊。

その亡霊は未だにこの『世界』に存在する。

元は同じだったはずなのに、いつの間にか分かれてしまったもう一人の自分。

ハセヲは愛しい呪療士『志乃』のために狂気へ堕ちた。

でも楚良は……？

「僕ちゃんにはカンケーないよw」

声が弾んでいる。

「僕は僕。ハセヲはハセヲ。別人だし」
べっつじん

『The World』では全てを偽れる。

そこに現実リアルは関係ない。

たとえ現実リアルを持たない存在でも、『The World』は受け入れられる。

0と1の世界で生きるものと、原子で構成された世界で生きるもの。

その世界に垣根は存在しない。

『……そうか。なら邪魔をするな』

「僕の邪魔をしないならねw」

『……どこまでがお前のテリトリーだ?』

「さあ? そこまで教えるほど、僕ちんお人よしじゃないしw」
クスクスと笑うと、声の主は溜め息を漏らした。

第7話（後書き）

もうすぐLinkの発売です。

楚良は出てこないんですね……。

第8話

△従順なる 怒涛の 万妖

ウザい。

どうしてこんな奴の誘いに乗ってしまったのだろう。

目の前には、志乃と同型PCの「アトリ」

アトリが目の前にいるだけでハセヲの心に波を立てる。

志乃と同じ顔だから？

志乃と同じ顔でハセヲに語りかけるから……。

何よりも三崎亮^{ハセヲ}を苛立たせるのは、アトリの口から語られる『月の樹』の思想。

他人からの受け売りをまるで自分の考えのように話し、しかもそのことに気付いていない。

たった1つしか見えていない『理想』を、たった1つの正義のように振りかざし、破る者には鉄槌を下す。

まるで、R：1の『紅衣の騎士団』のように。

全てを受け入れるのがこのThe ^{世界} World！

その点で、ハセヲは『ケストレル』を受け入れていた。

（ムカつくなあ……）

たった1つの枠に当て嵌め、はみ出す者を弾劾する。

協調を求められる日本では煙たがられる、「出る杭は打たれる」という構図。

それは亮が嫌いなものの1つだった。

双剣を握る手に籠る力を意識して抜き、ハセヲは何度も深呼吸をして気分を落ち着かせる。

アトリの言葉に耳を傾けず、すべて聞き流す努力をする。

それでも、1つ1つの単語が引っかかる。

耳障りな呪文。

ああ、八長調ラ音までしてきた。

それとは別の、耳障りな声も。

「あの……ハセヲさん……」

遠慮がちなアトリにハセヲは宝箱を開けてから目を向けた。

「何だよ？」

「あっち……。あっちの方から、何か聞こえませんか？」

「……そうか？」

心に波が立つ。

獣を解放しろという叫びが。

それとは別の『何か』の音。

「はい。こっちです！」

アトリが走って行ってしまふ。

無視しても良かったのだが、ハセヲは何かに導かれるかのようにアトリの後を追った。

第8話（後書き）

アトリが登場しました。

今回は割りと早めの更新です。もうすぐゲームも発売しますし。

最近一次創作の方にも手をつけました。

前々からネタはあったので、せっかくだから執筆してみようかと。

そういうことです。もし興味がありましたらそちらの方もご覧になってください。

第9話

△従順なる 怒涛の 万妖

獣神殿の裏。

そこに刻まれていたのは禍々しき紅の三角形。

トライエッジ
三爪痕

「聞こえる……。向こうから……音が聞こえるみたい……」

「^{トライエッジ}三爪痕が……ここに……?」

傷跡は夜のフィールドの中で禍々しく赤く光っている。

「トライエッジ……? そういう名前なんですか……?」

地震が起こったのかと思った。

「なに……！？」

傷跡に引き寄せられる。

転送された場所を見て、アトリが呟く。

「ここは……」

「エルディ・ルー……」

ロストグラウンド
死所 エルディ・ルー

巨大な地底湖の中心には純白の樹大樹、フラドグドが。

2人の足は自然と地底湖に向かった。

「でも、こんな地底湖があつたなんて。……ハセヲさんっ！あそこ
に人が……！」

言われるまでもない。

フラドグドの根元に青年PCがいた。

肩には猫を乗せ、AIDAのバブルを手で弄んでいる。

そのバブルを見て、ハセヲの肌が粟立つ。

アレハ テキ

本能がそれを認識。

「なんだろ、あれ……とっても綺麗……」

恍惚とするアトリに、ハセヲは言葉を返せないでいた。

あんな禍々しいものを纏わせているあの青年。

彼はハセヲたちのことなど眼中にないらしい。

どうして背景であるグラフィックにどうして一般PCがいる!？
青年の肩に乗っているネコは!？

あの……黒い泡は!？

「……聞こえる……。『音』……あの人の方から……」

アトリが耳を気にする仕草をする。

猫が鳴いて、青年があやした。

そしてハセヲ達に気づく素振りを見せずにフラドグドの後ろへと回る。

「待つてください!」

青年に詳しい話を聞こうとしたアトリが走り出す。

「アトリ！」

思わずハセヲは叫んだ。

「え？」

アトリが立ち止まり、ハセヲを振り返る。

その背後に大量の黒いバブルが。

とっさにハセヲはアトリを追いかけた。

ハ長調う音

普段は忌み嫌うもの。

——アレは敵だ。

欲望の捌け口を求めていたスケイスが笑う。
ハセヲ

(いいぜ……来い……！)

スケイス
ハセヲは進んで身を委ねた。

——俺は、……！

「危ないぞ！ 止まれ！」

声が響いた。

第9話（後書き）

祝Link発売！

ということで投稿です。次のアップがなるべく早くなればいいのですが……。

第10話

まるでスローモーションのようにアトリが倒れる。

またハセヲの目の前で志乃^{アトリ}が……。

それを見た瞬間、ハセヲは我を忘れた。

ソウ、それこそがハセヲがハセヲたる由縁。

もっと怒れ、憎しめ！

そうすればオレが……！

ハセヲの思考が入れ替わる。

裏^表から表^裏へ
表^裏から裏^表へ

だが、それを寸前で押し止めたのは見知らぬ乱入者だった。

「下がっている!」

間に割り込んできたのは黄色い衣装を着た男のスチームガンナー

反射的に反発しようとし、はっとしてハセヲは口を噤む。

八長調ヲ音

忌まわしき禍々しき波。

「行っけえええ！！！！！！」

彼の体に黄色い紋様が現れる。

「俺の、メイガス！」

全身の産毛が総気立つ。

まるで世界が反転したかのような……。

「増殖」、メイガス。

まるで葉を連ねたかのような、細長い体形。

姿が異なっているが、面影がある。

何より内なる存在が同胞の存在に歓喜する。

元は同じ存在。

同じ母から生まれたモノ。

嫌な臭いが届く。

石油と、血が混ざったような臭い。

黒い泡から生まれた単細胞生物がレーザーをメイガスに撃つ。

メイガスはそれを防ぎ、単細胞生物へと突進。

「うおおおおおおっ！！」

データを書き換える力。

存在を修正し、上書きし、無に帰す力。

データドレイン。

それが単細胞生物に放たれた。

悲鳴のような空気の震えがハセヲにも伝わる。

「無事かい？おふたりさん」

裏返っていた世界が元通りに修復されていく。

乱入者がハセヲとアトリに声をかける。

すでにメイガスは消えている。

「……………」

「……なんか、あんま歓迎されてないみたいだな」

ハセヲが無言でいると、青年は肩を竦めた。

「まあいいや。そっちの子。大丈夫？」

「……アトリ？」

小さく声をかけると、アトリが身を起こした。

「あれ？ 私……どうしちゃったんですか？」

「どうって……」

「なんか……変なモンスターに襲われて……。すごい『音』がして……びっくりして、記憶飛んじやったのかな……なんて」

（記憶が……飛んだ？）

ハセヲは青ざめる。

「なにはともあれ、間に合ってよかった」

「あなたは……？」

初めてアトリは青年に気づく。

「俺……？ ああ、ええと……。実はCC社の調査員なんだ」

「システム管理の人？ GMさん？」

「ま……似たようなもんかな。このエリアのバグ通知を受けて、飛んできたんだけど……」

「あのモンスター、バグデータだったんですか？」

「そう。データが修復されるまで、ここには近付かないでね」

（ふざけんな。あれがただのバグデータだと？）

データドレインを使うのがCC社の社員？

納得がいかない。

だが、今はそれよりも気分が悪い。

「……行くぞ」

「……そうですね」

アトリも同意してくれた。

「おいハセヲ」

せっかくカオスゲートに向かおうとしたのに、青年が呼び止める。

「……GMはいちPCの通り名まで覚えてるわけw」

「いや。ただ、偶然にしちゃ出来すぎだなと思ってな」

「偶然、か……」

偶然じゃない。

俺たちは惹かれあう。

（黙れ……）

それっきりハセヲは振り返ることなく、カオスゲートを目指した。

第10話（後書き）

ようやくメイガス登場。

第11話

「なんか……すごいことになっちゃいましたね」

マク・アヌのカオスゲートに戻ってきて、アトリが微笑む。

その態度がハセヲの気に障った。

「お前……のほんとと笑っている場合か！ 1歩間違えばお前……」

『泣かないで……男の子、でしょ……？』

大切なあの人が消えていく。

慌ててハセヲは頭を振ってその光景を追い払う。

「……ハセヲさん？」

ハセヲが沈黙してしまったのを見て、アトリが首を傾げた。

「……何でもない」

「……でも、こんなことになって、迷惑かけちゃいました……よね？ あ……もう1度、チャンスを貰えませんか？」

真摯にアトリはハセヲを見つめる。

『瞳、逸らさないで。伝わるよ』

あの人の言葉の意味が何となく分かったような……気がした。

それだけでなくも面影を映してしまうのに。
でも中身は別物。

「……次誘うときは、経験地稼ぎのできるエリアにしろ」

それなのに……邪険に出来ない。

「はい！」

アトリは満面の笑みを浮かべた。

それは入力されたモーションのはずなのに、やけにハセヲにはリアルに見えた。

M2Dを外し、亮はベッドの上に倒れこむ。
仰向けに寝て、目を腕で覆う。

耳障りな音がする。

だんだんと近くなってくる、ハ長調ラ音。

「メイガス……」

その名を呟いたとたん、亮の中で『何か』が疼いた。

同じ母から生まれた兄弟。

アーキタイプ
同じ原型から生まれた同胞。

オレから生まれた息子。

「クソッ……！」

乱暴に身を起こし、足取りも荒く自室を出る。
階段を降り、目指すはキッチン。

階下にはやはり、誰もいなかった。

亮1人だけの家。
暗い家。

そんなの今まで気にしたことなどなかった。

——あの時まで。

「っ……！」

すぐに亮は薄暗い部屋の電気をつける。

とたんにライトが明るく部屋を照らす。

それからキッチンの戸棚から乱暴にグラスを取り、蛇口を捻る。

とたんに迸る水流をグラスが受け止め、水がなみなみと注がれる。
それから水道水を喉に流し込んだ。

「……くっ、はっ……」

気分が悪い。

窓から見える空は暗い。

暗闇を街灯が照らしている。

「……夜……」

先程ログインした時間さえ覚えていない。

「志乃……また、志乃を喪うところだったよ……」

第12話

モルガナ

母から生まれし子。

妄執から生まれた哀れな子。

砕かれても8つの欠片に分けられ、ただ母の命令に従うしかなかった子供たち。

アーキタイプ

その原型となつたのは地母神の怒りに触れた双剣士。
ツインソード

その妄執は、今も世界をさ迷っている。

今日もまた、亮は病院にいた。

「……また来る、志乃」

七尾志乃。

ネットゲームのプレイ中に意識不明になってしまった女性。

原因は不明。

分かるはずもない。

7年前だつて、解決したのは女神に選ばれた1プレイヤーだつた。

だが亮には、あの時女神に選ばれた少年のような力を持っていない。
むしろその時の負の遺産を抱えているまま。

だからって諦めるわけではない。

亮は病室を後にし、毎日通っている道を歩いていく。

いつもなら志乃の見舞いのあとはすぐ自宅に帰り、The Wor
ldにログインしている。

だが今日は違った。

亮が向かったのはとある診察室。

亮が顔を出すと、馴染みの看護婦がにっこりと笑う。

「三崎君、先生がお待ちかねよ」

「はい」

律儀に扉をノックし、入室する。

「失礼します」

「待っていたよ」

中で待っていたのは脳外科医の黒貝敬介だつた。

黒貝に示されるまま、亮は向かいのパイプ椅子に座る。

「顔色が悪いね。ちゃんと規則正しい生活をしているのかな？」

「……………」

亮は突かれきった表情のまま無言を保つ。

「……………君が七尾志乃さんのお見舞いに毎日行ってるのは知ってるよ」
黒貝の言葉に顔色を変えるが、黙って続きを待つ。

「……………未帰還者、だってね」

未帰還者。

8年前から起こった症例。突然意識不明に陥り、目を覚まさないのだ。

原因は不明。

当時、判明しているだけで計6人の人間が未帰還者になった。

性別、年齢、住所……………どれもバラバラ。

ただ共通しているのは全員が『The World』をプレイ中に意識不明となったこと。

その症状がまた起こっている。

今回もまた、原因は不明。

ただThe Worldの中では三爪痕にPKされると意識不明になるという噂があった。^{トライエッジ}

だから亮はハセヲとして、死の恐怖と呼ばれるまでPKKをし続けた。

「……………もう、いいですか？」

「三崎君……………」

困ったように黒貝は微笑みを浮かべる。

「先生には感謝してます。……でも、これは俺が解決する問題ですから」

そう言うと亮は席を立つ。

「三崎君……！」

黒貝の制止に、1度だけ亮は振り返る。

「もうすぐなんだよ、センセイ。だから止めるな」

「……………」

言葉を詰まらせた黒貝を見て、亮は笑みを浮かべる。

その笑みは、今の三崎亮を知る者からすれば考えられないような笑み。

現在の疲れきって弱々しく、どこか儚ささせある笑いではない。

精力でギラついていて、何かを求めているもの。

それを黒貝は7年の付き合いで見破った。

「アリガトーゴザイマシタ」

鞆を肩に担ぎ、診察室を出て行った。

「……………」

黒貝は溜め息をついて、カルテを見る。

病名の欄には、脳外科医である黒貝には本来関係のない病名が書かれていた。

病院内を歩いていく亮は、すぐに表情を消した。

「……もうすぐ？ 何がもうすぐなんだよ……」

そんなの決まっている。

でも認めたくない。

吐き気がする。

耳鳴りがする。

ずっと俯いていた亮は、すれ違った車椅子の女性の顔を見ることはなかった。

第12話（後書き）

今回はリアルの話です。

黒貝さんはもちろんあの人。この辺りの設定は小説から拝借しました。

第13話

ケータイがメールの着信を知らせる。

無表情に亮はケータイ画面を開き、相手を確認する。

表示された名前は……火野^{ひの}拓^{たく}海^み。
亮とは7年前からの友人だ。

同年で、共に同年代に友人の少なかった2人はすぐに意気投合した。

今では亮の数少ない、心許せる友人。

内容を読んで、亮は口元に笑みを浮かんだ。

とても凶悪な笑みを。

マク・アヌの傭兵地区にある@HOME前でクーンが待っていた。

「や、ハセヲ」

「……………」

「……あれ？ そんな怖い顔してどうした？」

「別に。とつとつ『レイヴン』に案内しろよ」

「なんか、俺嫌われてる……？（――；）」
「気のせいだろ」

家に帰った亮はクーンから来た『ハセヲ』宛てのメールを見た。
内容はクーンの所属しているギルド『レイヴン』の@ホームにハセヲを紹介することだ。

だが用件がそれだけでないことをハセヲは知っている。

「えーとね、『@HOME』っていうのはギルドごとに1つずつ用意されてる部屋なんだ」

「知ってる。ほら、ギルドキーくれ」

ハセヲだって過去『黄昏の旅団』というギルドに所属していたのだ。ギルドの説明くらい受けなくても知っている。

「分かったよ」

ハセヲが急かすと、クーンは苦笑してハセヲにギルドキーを渡した。

『レイヴン』の@ホームの中にはいつかの女性PCもいた。

「さて、と。改めてレイヴンへようこそ、ハセヲ」

「……この前のオバサン」

「!??」

ハセヲの先にいたのはボルドーたちに絡まれたときに割り込んできた^{グラップラー}拳術士だ。

このパイという女性も『レイヴン』のメンバーだったのだ。
即ちCC社の社員。

内で何かが歓喜で疼いている。

——『増殖』のメイガスに『復讐する者』タルヴオス。ククク……。

以前に増して声が大きくなっている。

このままじゃ吞まれる。

——何を怯えている？ お前は俺、俺はお前だろ？

（黙れ）

もう何度念じたか分からないことをまた繰り返す。

「あれ？ 知り合いだった？」

2人の間にわだかまる不穏な空気を見殺し……もしくは気付いていないのか、クーンが割り込んでくる。

「知らないわよっ！」

ムキになって女性が否定する。

「はは……（^ー^） 彼女はパイ、『レイヴン』のメンバー。

で、パイ……彼が——」

「……なるほどね。俺の監視をしてたってわけだ」

パイもCC社の関係者、というわけだ。

「でもオバサン、俺をお色気で誘っても……年が年だけに無理リアルを想像すると萎える」

「なっ……！ ちよっと、クーン！ こいつ叩き出して！ いくら『適格者』だからって——！ こんなヤツに、私達の仕事は任せられないわっ！」

「それは八咫^{ヤタ}が判断することだろ？」

「……ヤタ？」

どうやら八咫とやらが『レイヴン』のボスらしい。

「八咫様の手を煩わせる必要は——」

何か言いかけたパイだが、口を噤む。

「……はい、来ております」

パイが独り言にしか見えないことをしだした。

どうやらどこかの誰かと話をしているらしい。

「え？ 1人で！？ よろしいのですか？」

はっとしてパイがハセヲを見た。

「でも、彼は……。……判りました」

通信が切れる。

「いらつしゃい……八咫様がお会いになるそうよ」

パイが階段を上がり、@ホームの奥へと続く道を示した。

「この先に八咫様^{ヤタ}がいらつしゃるわ」

「……分かった」

ハセヲは1つ頷き、知識の蛇へと歩き出した。

@ホームの奥にあったのは無数のモニター。

4つあるルートタウンやダンジョン、様々なPCたちが逐一監視されている。

思わずハセヲはそれに見入ってしまった。

「知識の蛇にようこそ、ハセヲ君……」

部屋の奥に浮いている球体。

その後ろにいたのは妖扇士^{ダンスマカブル}の男性。

この男が『レイヴン』のギルドマスター、八咫。

「長い間、待っていた……。君が来るのを」

そして三崎亮^{ハセヲ}の友人。
リアルの名前を火野拓海^{ひのたくみ}という。

「……久しぶり、と言っておこうか」
「ハジメマシテ、だ。間違えんな」

遠い前世からの友人。

だが『ハセヲ』では初対面。

その辺りをすぐに八咫は心得た。

「フ……、そうだな。では三崎」

八咫が段を降りる。

PCの身長のせいで見上げる形になっているのに変わりはないが、
ここに立場の違いはない。

「お前はどこまで掴んでいる？」

“ハセヲ”ではなく“亮”として、“八咫”ではなく“拓海”に
答える。

「データドレインしたカイトそっくりのPC。未帰還者。黒いバブ
ルのモンスターに……禍々しき波」

挑戦的に亮は拓海^{ハセヲ}を睨む。

「CC者はメイガスとタルヴオスを指揮下においている。さらには
スケイスも監視下に」

「……………」
八咫
拓海は無言。

そうでなければここにメイガスとタルヴオスを宿すPCがいるわけ
がない。
CC社はどうやってか、禍々しき波をコントロールしようとしてい
る。

そして、スケイスとの因縁が強いハセヲをも指揮下に入れようとし
ているのだ。

「だから俺を“待っていた”……………違うか？」

「フ……………その洞察力と冷静さを少しは“ハセヲ”に分けてやればい
いのに」

八咫の言葉にハセヲは苦笑する。

「そりゃー無理。三崎亮とハセヲは別物だ。……………それで、説明しろ
よ」

先を促すと、八咫拓海は鷹揚に頷いた。

「バグではないバグ……………。本来『この世界The World』には有り得
ないはずの事象。しかし『この世界The World』に確実に存在する
現象……………。我々はそれらを総称してアイダAIDA、と呼んでいる」

「アイ、ダ……………」

聞きなれない名称。

呟いてもハセヲの言葉は変換されなかった。
ユーザーの言語を自動変換する辞書には登録されていない。

「Artificially Intelligent Data
Anomaly」

「人工的の、知的データ異常……」

それぞれの単語の頭文字を取ったのだろう。

「今はまだ一般ユーザーには知られていない。現段階においてはその程度のレベルだがな」

「……三爪痕はAIDAなのか？」
トライエッジ

「可能性は、否定できない」

それについては、まだ調査中なのだろう。

未帰還者はAIDAのせい。
だが原因のAIDAはまだこの『The World』にいる。

仕方なく亮は別のことを聞く。
ハセヲ

「……CC社は何のつもりなんだ？ あわよくば以前のように事件を隠蔽しようつてのか？」

「……危険は排除するのではなく管理するもの」
コントロール

「だからハセヲも管理するつてのか？ 理由は……スケイス？」

「その通りだ」

あっさり八咫は頷く。

「三崎はスケイス因子に選ばれた『適格者』……。クーンやパイもその1人だ。AIDAに対抗できるのは、現状、『碑文使い』をおいて他にない」

「……それで、スケイスの力を借りたいって？」

力を思う存分揮える場所が提供されるというのだ。

『ハセヲ』の中で何かがぞくりと蠢く。

凶悪な笑みが浮かびそうになるのを抑えるのに苦勞する。

——それは俺を解放するってことでいいんだよなあ？

初めは頑丈に縛っていた鎖がここになって壊れ、緩み、獣を解放しようとしている。

（テメエがいなきや志乃を救えないってことがよく分かった）

——ハハハッ、まだ言い訳するか？……だがいいぜ、協力してやるよ。

『死の恐怖』の力、女神殺しの力、俺たちの力をなあっ！

「……いいぜ。『The World』の異変……AIDAはもちろん、^{サイン}傷痕、^{トライエッジ}三爪痕のことを逐一報告しろ。そうしたらスケイスを出してやつてもいい」

^{ハセヲ}火野が言い出す前に、^亮が条件を提示した。

「……てつきり、^{トライエッジ}三爪痕についての情報だけかと思っただが」

「三爪痕だけって言ったらAIDA全体は分からないだろ？ 因果関係が不明な現在、それだけじゃ情報が不足する可能性があるからな。」

……あ、でもハセヲには三爪痕の情報だけでいい」

「……いいだろう。その情報は別ルートで送っておく。……だから、スケイスの力を振るってもらうぞ」

ハセヲ
亮がスケイスの力を使えると火野は確信している。
そのことに亮は舌打ちをしたくなった。

「……だけど、俺に指図すんな」

背後の気配に気付き、ハセヲはぞんざいな口調で八咫に言う。

「八咫様！」

パイが入ってきた。

「やはり危険です！　このような人間を……」

「……………」

無言で八咫はパイを見る。

「オバサンは黙ってるってさ」

もうここに用はない。

「彼のような人間が力を得るのは危険です！　なぜ、彼のような人間を……………」

「お前も分かっているはずだ。彼の碑文は、もう目覚めてしまっていることを。それに……スケイスを扱えるのは彼しかない」
パイには八咫の声に微かに笑みが含まれているように聞こえた。

八咫のリアルである火野拓海と三崎亮に接点がないことをパイはC社の調査報告書で知っている。

ということはやはり、ハセヲに対する可能性を見出しているのか。

何より、スケイスは特別だ。

第一相スケイスの碑文使いたるハセヲもまた特別。

三崎亮^{ハセヲ}を中心にして『何か』が動こうとしていることを、おぼろげながらパイは察した。

第13話（後書き）

拓海君登場。彼は割と贖罪されます。
今回は割りと長めでした。

ここは原作と大分違います。

第14話

ハセヲ、初めて接客業を体験する。

もちろん本意ではない。

初心者支援ギルド『カナード』のメンバーであるシラバスとガスパーがハセヲにギルドショップを押し付けたのだ。商品の設定値段を確認するが、どれもが良心的。赤字覚悟なのだろう。

「あとう……」

「いらっしゃいます！」

こうなったらもう自棄だ。

『死の恐怖』が笑顔で店番なんて絵にならない。

笑顔の裏ではシラバスとガスパーに呪いの言葉を吐いている。

ハセヲの笑顔はすぐに気難しいものに変わった。

視線の中に声をかけてきた客がない。

「……………」

何気なく視線を下にすると……………いた。

ウォーロック

魔導士の少年だ。

ターゲットにして名前を確認すると、さくほう朔望というらしい。

「あの……………ばく、ほしいものがあるんだけど……………」

舌ったらずで、外見同様中身も若い……………というより幼そうだ。

「『シロタエギクの花』……………。あります？」

言われてハセヲは商品リストを確認した。

「……………1つだけあるな。6000GPだ。どうする？」

「あ……………お金、足りない……………」

所持金を確認して、少年が肩を落とす。

「欲しいもんがあるなら、ちゃんと貯金しときな」

「ためてただけど……………。なくなっちゃったみたい……………」

「なくなっただって……………。自分の金なら、使い道くらい覚えてるだろ

？」

「わかんないよ！……………きのうまで、朔のばんだったもの」

「朔のばん？」

「朔はお姉ちゃんだよ。……………このPC、きのうまで朔がつかってた」

「……………要するにお前ら、1つのPCを姉弟で交互に使ってるわけか

？」

「うん……………」

時々あることだ。

兄弟で同じPCを使っていたり、親が昔使っていたPCを子供が継ぐというケースもあった。

「それで、お前が貯めてた金をねえちゃんが使い込んだじまった、と……………。ひでえねえちゃんだなw」

「……うん、いいの。どうせ朔のたんじょうびにプレゼントをか
うつもりだったから」

「誕生日？」

「ふたごだから……ぼくのたんじょうびでもあるんだけど……」

「誕生日か……」

^亮ハセヲの脳裏にある光景が過ぎる。

1人ぼっちの誕生日。

親が帰宅するのを諦めたのは……一体いつだったろうか。

明かりもつけず、自分で買って来たショートケーキを頬張るだけ。
ホールで買ってでも食べきれないから。

ケーキを買うのも億劫になり、いつしか誕生日という記念日はなくな
った。

でも、姉には誕生日を祝ってくれる弟がいるらしい。

「……仕方ねえな……まけてやるよ！」

「ほんとにいいの!？」

「ああ……ねえちゃんによろしくな」

「うん！　ありがとう！」

6000GPに満たない金額を受け取り、シロタエギクの花を渡す。
すると少年は満面の笑みを浮かべ、走っていった。

「ぼく、望っていうんだ！　たりなかったぶん、きつとかえすから

ね、ハセヲにいちゃん！」

望はそれだけ言っと、カオスゲートのあるドームへと走っていく。

「朔と望で……朔望か？」

名前はそういう意味だったらしい。

朔望……策謀。

何か作為的なものを感じるが……問題はないだろう。

今は、まだ。

第14話（後書き）

望登場。

ハイペース更新もそろそろ息切れかも……。

第15話

シラバス、ガスパー、アトリといるとペースを乱されっぱなしだ。

初心者支援ギルド『カナード』に入ることを承知したが、ギルマスになるとはいつていない。前マスターであるシラバスに押し付けられたのだ。

しかも聞けば、元々『カナード』を設立したのはクーンらしい。

アバター
憑神。

女神殺しの力。

それを今、あの女神が調停している世界のためにその力を振るうなんてなんて皮肉だろう。

女神を疎んだ地母神の使いが、今や人の手先。

『G・U』

レイヴンの隠れ蓑。

拓海から「個人的な連絡手段」を通じて手に入れたファイルには7年前の事件のことが書かれていた。

番匠屋ファイル。

Grow Up “成長”
Gracels Unison “「神」に見離された調和”
Geek's Utopia “ハッカーたちの樂園”
Guilty Universe “罪深い世界”
Genesis of Ultima “究極の創世記”
Guardian Ubiquitos “遍在を守護するもの”
Gateway to Utopia “理想郷への門”
Gathering of the Unwilling “不本意な収集物”
Genetics of the Unknown “それは未知数の遺伝学”
Genocide of the Unfaithful “不誠実の集団虐殺”
Generation of Unity “美しき統一の世代”
Guidetoan Uprising “動乱への導き手”
Gate of Uroboros “無限の扉”

『レイヴン』とはカラスのこと。

ヤタガラス——三本足の鳥。
道案内をする神の使い。

「皮肉だな」
小さく亮は呟く。
「だけど……手がかりは手に入れた」
志乃を救うための。

リアルで亮はコントローラーを机に置き、拳を握り締める。

—— 違う。力を正々堂々と使える場所を、だ。

お前の中の狂気を解放できる場所を、だ。

「テメエは大人しくしてろ」

—— ああ、いいぜ。俺たちは暴れられたらいいんだからな。

「お前だけだ。俺たちじゃねえ」

—— ハハッ、強情だなあ。

それっきり、声は聞こえなくなった。

亮は目を閉じ、意識を沈める。

闇が大きく顎を開いている。

目の前が暗くなる。

闇に吞まれる。

『クスクスクス……』

笑い声が響いた。

そこは自由な世界だった。
だが同時に窮屈な世界だった。

「スケイス……！」

忌まわしき名をあえて口にする。

「イニス、メイガス、フィドヘル、ゴレ、マハ、タルヴオス、コル
ベニク……！」

母
モルガナからアウラ^娘に向けられた、自由を奪うための8本の鎖。

それが自由意志を持ち、今では世界をさ迷い思い思いの場所で遊んでいる。

「さうて、役者は揃って脚本家は何をするつもりなんだろうねw」
喉を震わせ、舞台^{世界}を見下ろす。

「昔のオトモダチだけど、今はオットモダチじゃにゃーい！」
そう宣言し、彼は世界から姿を消した。

第15話（後書き）

やはり更新速度が落ちます。

LIVE劇奏前にもう1、2話は更新したいです。

第16話

仮眠するだけのつもりが、いつの間にか眠り込んでしまったらしい。
ケータイの日付は翌日を示していた。

「チツ……………」

舌打ちをして、亮は反動をつけてベッドから起き上がる。

「…………俺、ベッドで寝たっけ」

それすら覚えていないほど眠かっただろうか。

…………いや、違う。

溜め息をつくとき、空腹を覚えた。

『ハセヲ』ではなく『亮』にメールが届いている。

送信者：火野拓海

件名：無題

『ハセヲ』にはまずスケイスを使いこなしてもらうつもりだった。

だが君には意味のないことだろう。

AIDAに関して、実を言うとまだ我々は何も掴んでいないのに等しい。

そこで、だ。

ルミナ・クロス。^{アリーナ}闘宮のことは当然知っているな？

^{チャンピオン}現宮皇エנדュランスの戦いを1度見ておきたまえ。

「^{チャンピオン}現宮皇つつつたら……エルク、じゃなくてエנדュランスじゃね

「か」

本名一之瀬薫。

R：1のときは呪文使いとしてプレイしていた。

イリーガルの猫型PCミアと共にいて、その正体であるマハが倒されたことにより一時カイトを怨むものの、最終決戦にはカイトと協力した。

だが、2年前……。

「……っ」

あの“最期”を思い出してしまい、亮は息を詰まらせる。

「……くそっ」

何とか呼吸を整え、それだけ毒づいた。

依存対象を喪った彼は、もう2度と喪わないために杖ではなく剣を必要とした。

後方で援護をし皆を守るのではなく、前に立ち皆を守る盾を目指したのだ。

「……奴に何かあるのか……？」

薫の連絡先を知らないわけではないが、連絡を取ったことはない。取るうとも思わない。

「……行けば分かる、か」

百聞は一見にしかず、とも言っ。

溜め息をついて、亮はハセヲになった。

第16話（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありません……。また一ヶ月に1度のペー
スに戻ります。

第17話（前書き）

お久しぶりです。

第17話

Ω闘争都市ルミナ・クロスはどのルートタウンとも違う、ネオンの輝く街だ。

R：1でのカルミナ・ガデリカを思い出す。

「ふん……」

今までここに足を踏み入れたことはなかった。

P K Kハセヲにアリーナは関係のない場所なのだから。

「あれ？ ハセヲ、こんなトコで何してるんだ？」

「ハセヲはよくアリーナに来るの？ 参加したことは？ あるの？」

なんとというタイミングか、シラバスとガスパーまでいた。

そつえばルミナ・クロスサーバーメンテナンスが終了し、ようやく解放されたばかりだった。

そのためにようやく入れるようになったルミナ・クロスにプレイヤーが集まっているのかもしれない。

「いや、ねーよ」

「ええ？ 本当に！？ あの『死の恐怖』が？」

「P K Kとアリーナバトルは関係ないでしょ（^ー^）」

「観客の見世物になってランク稼ぐなんて、俺の性に合わねえし。

……お前らはよくアリーナに来るのか？」

「そんなに来るわけじゃないよ。なんたって今日は……」

「あ！ そろそろ、始まるんじゃないかあ？」

「……タイトルマッチか」

「うん。行こ、ハセヲ」

何故か2人と一緒に紅魔宮のタイトルマッチを観ることになった。

アリーナには紅魔宮、碧聖宮、竜賢宮という3つのクラスがある。
まず初めに挑戦することになるのが紅魔宮、つまり1番レベルの低いランクだ。

今日は紅魔宮の宮皇エンデュランスのタイトルマッチ。
チャンピオン

挑戦者は最近頭角を現したランカーだというが、そこまでアリーナに興味があつたわけではないので詳しく知らない。

そして大歓声と共に現れたのが斬刀士……エンデュランス。

「……あいつが」

いつもミアの後ろにくっついて回っていたあの気弱な少年。

それはエルディ・ルーでアトリと共に見たあの青年だったのだ。

アリーナで誰ともパーティを組まず、常に1人で戦い、常勝してきた宮皇。

そうしてタイトル防衛線が始まる。

エンデュランスはいつものように、まずは挑戦者の攻撃をただ黙ってかわすだけ。

だがその動きは滑らかで、とてもコントローラーで入力しているとは思えない。

改造しても、ここまでの動きは再現できないだろう。

まるでそこに本物の人間がいるような……。

「……つまらないな」

エンデュランスの声がアリーナに響く。

「こんな戦いでは……『彼女』が退屈してしまうよ……」

音がする。

ハ長調ラ音。

それに嫌な臭い。

「これは……」

エンデュランスが光に包まれ……現れたのは……。

「『誘惑の恋人』……マハ……!」

頭痛がする。

「どうかしたのか？」

横のガスパーの声も耳に入らない。

他の者には目に入らない姿。

「消えてくれ……キミたちはみんな、醜いただの人形だ……」

そのままエンデュランスはマハの力を使い、挑戦者を倒していく。

挑戦者もどうしてやられたのか分からなかっただろう。

運が悪ければ少しの間リアルで昏倒していてもおかしくない。

そしてこれは、あたかもエンデュランスが挑戦者を『瞬殺』していたかのように見せる。

『アバタイ
憑神』

『碑文使い』にしか見えない光景。

それをハセヲは見た。

「すごかったねえ」

「っていうか途中から、全然ワケ分からん、って感じ（・・）」
あれが上級者の戦い方なんだよね、きつと

「ハセヲは……どうかしたのか？」

「……あいつ」

ようやく頭痛が治まってくる。

「……なるほど。そういうことが」

あの猫は今もエルクと共にいる、ということだ。
八咫はこれをハセヲに見せたかったのだろう。

そして知っていて放置……ということはCC社はエンデュランスを
管理下におけていない。

「……ハセヲは流石だなw ちゃんと判ってるみたいだし」

「そなの？」

「……あんなもん、戦いじゃねえよ」

静かに、そうハセヲは毒づいて踵を返した。

「ちよつと……！」

「待つておくれよお！」

その後ろを慌ててシラバスとガスパーが追いかけるが……ハセヲの知ったことではない。

第17話（後書き）

実に2ヶ月ぶりの更新です。申し訳ありません。
別ジャンルに浮気中なもので。

そんなわけで取り扱いジャンルが増えていたりします。

第18話

「待つてつてば！ ハセヲお！」

背後からガスパーの声がした。

立ち止まったハセヲの視界の端に、見覚えのある後姿が掠める。

「……オーヴァン！」

思わずハセヲは駆け出した。

闘宮の裏へと続く路地裏の途中にオーヴァンは佇んでいた。

「……やあ、ハセヲ」

「やあじゃねえよ」

何かが第六感に障る。

思えば初対面からそうだった。

初心者専門のPKにやられ、そこを助けられた。

それがきっかけでハセヲは『黄昏の旅団』に入ったのだが……。

あるはずもないアイテムとされている『キー・オブ・ザ・トワイラ

イト』を探すため、過去の遺物であるウィルスコアを集めたり……。別にハセヲは『キー・オブ・ザ・トワイライト』が存在しないとは思っていない。

オーヴァンには、『ハセヲ』を惹き付けるものがある。それは今も同じ。

だがなぜか、オーヴァンの異形の左腕が気になる。今まで意識したことは何度もあるが、調べようとは思わなかった。

何故か嫌な臭いが漂っているような気がする。

「オーヴァン……あなたは……」

聞きたいことが沢山あって、感情が溢れそうになる。

「『三爪痕』^{トライエッジ}。倒せなかったか……」

その言葉に思わずハセヲは息を呑む。

「どうやら、もっと強い『力』がないと、奴には勝てないようだ」
「……………」

脳裏を先ほど見たマハヤ、クーンの操る憑神のことが過ぎる。そして最後に思い浮かべたのは……白い死神。

「…………畜生っ。このままじゃ…………」
思わず、ハセヲは頭を抱えた。

「闘宮でエンデュランスの戦いを見ただろう？」

「……ああ。あいつは一体……」

「奴は満たされない想いを追いつける者……。ある意味において、お前と同じだ。しかし、奴は……お前に足りないものを持っている」
オーヴァンはハセヲに背中を向ける。

「……なんだよ、それ」

「……その答えは、お前が1番よく知っているはずだ。……俺は、いつだって待っている。お前が——」

「俺が……？」

「いや……」

「なんだよ？」

「……また会おう、ハセヲ」

そう言い、オーヴァンがログアウトした。

「つて、おい！ 待てよ、オーヴァ……！」

叫びながら亮はオーヴァンの過去ログを漁っていた。

だがオーヴァンのPCはロスト。今までどこにいたのか不明。それはこれからも同じだろう。

「チッ……」

舌打ちをして、自分もログアウトしようとしたところ、背後から声がかけられた。

「ちょっと、アンタ……！ こんなトコで何してんねん！？」

「お前は……」

それはハセヲも見ただことあるPCだった。

カーソルをターゲットして名前を確認する。

朔望

間違いない、ギルドショップで会った子供だ。
だが、あのととは様子が違う。

そういえば、姉と同じPCを使っているといっていた。
ということは今は姉の番なのだろう。

そして弟が望で、姉が朔と名乗っているわけだ。

「なんや、人の顔ジロジロ見て。キシヨイわあ！……あ、判った！
アンタもエン様目当てやろ！」

朔は何故か勝手に決め付けてくる。

姉弟でここまで性格が違うところか。

「ダメ！ 許さへんよ！ エン様はウ・チ・と赤い糸で繋がってる
んやから！」

勝手に赤くなる朔に、どう対応していいか分からない。

「おい！ 急に走り出すからビックリしたよ」

「はふはふ……ふう……（・・）」

シラバスとガスパーがようやく追いついて来た。

「アンタら、うちのエ……！」

唐突に朔が言葉を切る。

その直前に、ハセヲの耳に何かの音が届く。
そしてあの嫌な臭いも。

壁から黒い泡が湧き出たかと思うと、そこからエンデュランスが現れたのだ。

「エン様〜！ お疲れ様ですう！！ 今日ホンマ、最高の試合見さしてもらいました！」

その変わり身の早さにハセヲは感心した。

しかしエンデュランスは朔の言葉を無視し、ハセヲの前に立つ。

「アンタ、何のつもりやねん！？ エン様はアンタみたいなカスが口きける存在とちゃうんや！ とつとそどこき」

ハセヲも朔の言葉など耳に入らなかった

「……お前、ロストグラウンドでAIDAといたな」

「……………」

エンデュランスは答えない。

だが聞いていないわけではなさそうだ。

ならば、ハセヲは質問を変えてみた。

「……さっきの憑神^{アバター}とその肩に乗ってるネコ、関係あるのか？」

そこでようやくエンデュランスはハセヲに興味を示したらしい。

「……ふ〜ん。キミにも『彼女』が視えたんだ。……だけどそれだけか。キミには『力』がない」

「なに？」

ハセヲが顔色を変える。

「力」がない、だと？

「『彼ら』を理解する心もない……。『視えた』ところで、大勢の中の一人には変わりない……………」

ハセヲの頬にエンデュランスが触れてきた。

手袋越しの、人肌の暖かさと……奇妙な冷たさが伝わる。

「キミは何もできないまま年を取って……。そして、死んでいくんだ……。可哀想に……。かわいそう……。カワイソウ……」

何も出来ない？

どうしてそんな同情されなければいけない？

この俺が……。可哀想？

駄目だ。

抑えきれない。

ふざけんな。

抑える必要もない。

「……へえ」

エンデュランスの手を払いのけた。

「この俺に、『力』が無いと言うのか？」

その反応にエンデュランスは僅かに小首を傾げる。

「言うじゃねえか弱虫が」

「僕が……弱い……？」

「アンタ……！」

朔が何か言おうとしたが、ハセヲに見られて思わず口を噤む。

ハセヲは笑みを浮かべていた。

ただそれだけなのに、何故か朔は気圧される。

朔は気付かなかった。

これが『恐怖』という感情だということに。

「よりもよってこの俺に『力』がない、だって？ 可哀想、だって？ ククク……アハハハハハハハハ！」

絶えられなくなってハセヲは腹を抱えて大声で笑う。

「言ったなエンデュランス！ あの、猫の後ろに隠れて何もできなかった弱虫が！ この俺に！？」

「キミは……」

初めてエンデュランスが顔色を変えた。

「なら証明してやるよ！ あの恐怖を知らないアンタに、死の恐怖を教えてやるさ！ 猫がいなくなるくらいの恐怖に耐えられないんじゃない、本当に未帰還者になっちまうかもね！」

それから唐突にハセヲは笑いを引っ込めて、エンデュランスを見据える。

エンデュランスは背筋が震えるのを感じた。

「俺はテメエみたいにペットじゃないんだ。……覚悟しとけよ、

俺は『死の恐怖』だ。テメエらにこの鎌で刻み込んで、十字架で磔にしてやるよ」

エンデュランスではない。

これはエンデュランスが使う憑神……マハに語りかけているのだ。

ハセヲの手に当然鎌はない。ここはルートタウンのひとつで、前のヴァージョンならいざ知らず武器が出せるわけがない。

だというのに、エンデュランスはハセヲに底知れぬものを感じた。

まるで刃を首につきつけられているような感覚。

殺気。

並みのPKでは決して太刀打ちできない威圧。

それをエンデュランスは受け……底知れぬ感情を抱いた。

「そんなニセモノに癒着してるようじゃ、また殺されるぜ？ あのネコのようにな」

エンデュランスの肩に乗る猫を見て、ハセヲは笑みを浮かべる。

エンデュランスもしばらくハセヲを見ていたが……やがてルミナ・クロスのネオンの中に消えていった。

「……フン」

朔も悔しそうに顔を背け、エンデュランスの後を追いかけた。

「ハセヲ……？」

ガスパーがハセヲの顔を覗き込む。

「……あ」

はつとしたように、ハセヲはガスパーを見た。

「無茶だよ！ エンデュランスにあんな啖呵切っちゃって！」

シラバスの言葉にハセヲが少し考えこむ。

「啖呵……?」

「でも、どうやって宮皇と戦うの?」

「……宮皇と戦うためにはトーナメントで勝ち抜かないといけないんだよな」

アリーナランカーとしてのレベルを上げて、そこでランクが1位にならなければエンデュランスには挑戦できない。

そしてトーナメントに参加するためには、アリーナランカーの上位16位に入らなければならない。

次のトーナメントまで時間も少ない。

「……何とかなるさ」

「簡単に言うなあ（^ー^;）」

「レベルも20以上ないとキツイよ? パーティも集めないと……」

「幸い今夏休みだし、ぶっ続けてやればレベルも20くらい軽く超える。それに俺、パーティ組むつもりないし」

「ええ〜!？」

そう言うで大袈裟にガスパーが驚いた。

「ハセヲ……パーティのメンバーが少ないと不利だって知ってるでしょ?」

シラバスもハセヲの身を案じているらしい。

「1対多数は慣れてる。下手な奴と組んで足を引っ張られたくないしな……。それに、あいつは俺の手でぶっ飛ばす」

「でも……ガスパーは極度の上がり症でアリーナはとても無理だけど……僕なら協力するよ?」

その言葉に、ようやくハセヲはシラバスとガスパーを見た。

「……お前ら、何でそんなに俺に関わるんだ?」

それはずっと気になっていたこと。
どうしてレベル1の、『死の恐怖』とまで恐れられているPKKに
関わろうとするのだろう。

「何でって……」

困ったようにシラバスとガスパーが顔を見合わせた。

「……元々俺はソロプレイヤーだし、ロクな連携を知らない。パー
ティなんて組めるわけないだろ」

「そんなことないよ！ ハセヲ、リーダーシップあるみたいだし……」

……

「……エンデュランスだって1人だろ」

「エンデュランスは例外だって」

「ハセヲはともかく、僕みたいなへっぽこが真似しても勝てるわけ
ないよ（――）」

「だから、俺が1人で戦うんだろうが」

ハセヲが溜め息をつく。

「……とにかく、メンバーが必要になったらメールしてよ」

「ああ、必要になったらな」

恐らくメールはしないだろう。

第18話（後書き）

今回はちょっと長め。エンデュランスとの出会いでした。

……映画館に行って・hackの前売り買わなきゃ。

第19話

頭を抑えて、亮はベッドに倒れ込んだ。

「……くそっ」

ログアウトしたのはいいが、電源を消す気力もない。

記憶が途切れている。

エンデュランスに何て啖呵を切ったのか覚えていない。

頭痛を覚え、頭に手をやる。

「勝手に出てきやがって……」

そう毒づくが、聞いていたのは当然亮以外しかない。

携帯電話が振動する。

出るのが億劫だが、相手が分かると仕方なく亮は通話ボタンを押した。

「……はい」

『エンデュランスの戦い、見たな』
「ああ」

相手は火野拓海だ。

「……お前さ、『ハセヲ^俺』をエンデュランスに焚きつけただろ」
『その通りだ』

あっさり拓海はそのことを認めた。

「てことはやっぱりエンデュランスが誘惑^{マハ}の恋人の『碑文使い』だって知ってんだな」

『彼らしいと思わんか?』

「はっ、どんだけ執着してんだよ。あれから2年だぜ?」

CC社の火事から2年。

R:1のデータが消えてから、2年。

『……何かあったのか?』

亮の調子がいつもと違うことに気付き、巧みは訝しげな声になる。

「……エンデュランスに啖呵きつたとき、持病が出たのさ」

『……そうか』

しばらく沈黙が続く。

「……なあ火野」

『何だ?』

「お前、アトリって知ってるか?」

『アトリ……?』

「片仮名でアトリ。俺と一緒にエルディ・ルーにいた女呪療士」

『……ああ、いるな』

どうやら電話の片手間に資料を呼び寄せたらしい。

「……あいつさ、音が聞こえたんだって」

『音?』

「△従順なる 怒涛の 万妖 にある爪痕サインから音が聞こえたんだっ

て。……俺にも聞こえたから問題ないと思ってたけど、あれは『憑アバ

神』の……AIDAの音だったんだ……」

なあ火野、アトリも『碑文使い』なんじゃないか?」

『……そうだ』

ゆるゆると亮は息を吐いた。

『スケイスを含めてメイガス、タルヴオスをG・U・は指揮下に入れている。そしてイニスとマハが監視対象。……他のについては不

明だ。アトリはイニスだと思われる』
「……………そうか」

死の恐怖 スケイス

惑乱の屋気楼 イニス

増殖 メイガス

運命の預言者 タルヴォス

策謀家 ゴレ

誘惑の恋人 マハ

復讐する者 タルヴォス

再誕 コルベニク

それが凶々しき波の名前。

残るはタルヴォスとゴレ、そしてコルベニク。

G・U・は『碑文使いPC』で構成されるギルドだ。

ならば、ギルドマスターである八咫も『碑文使いPC』ではないの
だろうか。

CC社が用意できなかったのか、それとも……………。

そこで亮は思考を打ち切った。

持たざる者には持つ者の苦悩が分からないし、その逆も然り。

「……………三崎、大丈夫か？」

「……………ケツ、俺にこう仕向けたくせによく言っぜ」
携帯電話を持つ手に力が籠る。

「絶対にエンデュランスをぶちのめす。アンタは高みの見物でもし

てな」

『三崎……いやハセヲ……』

亮はそれ以上拓海の声を聞く前に電話を切った。

「俺は……ハセヲだ……」

思考を切り替える。

ここにいるのは『三崎亮』ではなく『ハセヲ』

『死の恐怖』と恐れられたPKKだ。

いや……そもそも『三崎亮』など、ここにはいない。

「やってやる……！」

決意を新に、ハセヲはM2Dを手にした。

絶対に許せない。

あいつは俺のことをコケにした。

だから仕返しをしてやる。

大勢の前で無様に地べたに倒れ伏した姿を晒してやるのだ。

翌日、気がついたらベッドで眠っていた。

「~~~~~」

頭が重い。

額に手をあててみるが、熱はないようだ。

気分が晴れない。

カーテンを開けてみるが、まだ日が昇ったばかりだろう。

「……ああ、そうか」

外の光景をまるで親の仇のように睨む。

それは『死の恐怖』と呼ばれたときよりも冷たく、しかし感情を感じさせないものだった。

「……行くか」

普段着からジャージに着替え、亮は自室を出た。

例え志乃を喪おうとも、亮には変えられなかった習慣がある。それは定期的な通院と、運動である。

最近アウトドア引きこもりという言葉が生まれているが、亮はM2Dを持たず、純粹に走ることをだけ为目的としている。

この日課は7年前、ウィルス性麻痺疾患で半年以上も入院してから続けるようにしている。

そのお陰、というわけでもないのだが、2年前に入院してから大きな病気になったこともない。

30分以上も走りこんでから、家の近くにある公園での筋トレをする。

外見からは分からないだろうが、意外と亮は筋肉がついているし、体力もある。

1度だけ、M2Dをつけたままジョギングをしたのだが、どうやらそれは亮のやり方に合わなかったらしい。

感覚の問題なのだが、しっくりこなかったのだ。

結局、どれだけ切羽詰っても、志乃を助けたいという焦燥に駆られても、この時間だけは削れなかった。

その分学校の授業時間を削っているのだが。

宿題も家でやらず、学校の休み時間で仕上げていた。授業中は睡眠時間。

そういうスタイルで亮は数ヶ月を過ごしていた。

だが夏休みに入り、睡眠時間は最小限になった。両親がよく留守にするのをいいことに食生活も乱れに乱れている。

夏休みの宿題はほとんど手付かずで残っているが、亮にやる時間はない。

今日だって、両親は帰ってこない。

いつもそうだ。

帰ってくるといいつも結局帰宅しなかったり、帰宅したとしても家には睡眠にきているというような具合だ。

一通り日課を終え、誰もいない家に入る。

シャワーを浴びて汗を流し、濡れた髪をタオルで拭きながら冷蔵庫の中身を物色。牛乳をコップ一杯呑み、運良く残っていたサラダを出す。

たまたま残っていた食パンをトースターに入れ、トーストが出来上がっている間に冷蔵庫から賞味期限ギリギリの卵を取り出し、フライパンに油を敷いてついに残っていたハムを乗せて火をつける。

卵を割り、半熟になったところで火を止めた。

それを皿に盛り、リビングのテーブルに置く。

「いただきます」

ちゃんと椅子に座ってから手を合わせ、焼きあがったトーストに齧りついた。

久しぶりにインスタントじゃない食事にありついた。

1人っきりの食事。
1人っきりの家。

そんなのにもう慣れた。

「それでも俺は、^{三崎亮}ここにいる」

「ここにハセヲはいない。」

第19話（後書き）

伏線を張っていくのは難しいです……。

1カ月に1度というペースが確立していく中ですが、これからどんどん忙しくなってしまう。果たしてちゃんと更新できるかどうか……。

なるべく更新できるように頑張ります。

第20話

なんて冷たい目をする子供だろうと思った。

少年はこの世界を何も楽しめていない。ただ淡々と、与えられた役割をこなしているだけ。

そう思うととても放つてなどおけなかった。

「帰って来たぜ『The World』！」
そう叫んでログインしてきたのは和風の赤い衣服を着た重槍士だった。

早朝といえど、夏は暑い。
地球温暖化のせいで、都内の気温は7年前よりも確実に高くなっている。

そういえばリニアモーターカーがようやく開通するな、などと最近見たニュースを思い返しながら、ジャージを着ている亮は家を出た。

時刻はまだ5時。

昨夜も遅くまでハセヲのレベル上げをしていたため、寝不足なのは否めない。目にはうつすらと隈が。

欠伸を噛み殺し、軽く準備体操。

すっかりアキレス腱も伸ばしてから、その日も亮は走り出した。

亮が家に帰って来たのはそれから1時間後。

シャワーを浴び、タオルで水気を取りながら服を着替える。

「あら、お早う亮くん」

「……母さん、帰ってたんだ」

どうやらシャワーの間に帰ってきたらしい。

「でも、すぐに会社に行かなくちゃ」

「また、しばらく泊まり？」

「ええ……ごめんね」

「別に。もう夏休みだし」

素っ気なく答え、母親が買ってきたらしい大手コンビニチェーンのビニール袋から食パンを取り出し、トースターに入れた。

「……亮くん、学校の成績は？」

それに関してはちゃんと電話で報告したはずだ。

にも関わらず、この目で確認しなければ気が済まないらしい。

このために、この母親は帰って来たのだ。

「……ちよつと待って」

階段を登り、2階の自室へと向かう。

机の上に置きっぱなしになっている封筒を引っ掴み、リビングに戻った。

「はい」

渡された封筒から1枚の紙を取り出し、母親はそれを不安そうに眺める。

「……成績、少し落ちたんじゃない？」

何を言いたいか分かる。

だがここで下手に言つと、この母親はヒステリーを起こすのだ。

「ごめん。来学期から気をつける」

「そう……？ 亮くん、もう高校2年生なんだから……」

「分かってる。ごめん」

「本当に……？ ゲームを止めてくれる？」

ネットゲームを、止める？

あの世界から離れる？

頭の奥が鈍く痛む。

「……くん？ 亮くん？」

はっとして亮は右手を振った。

無意識に頭を押さえていたらしい。

「大丈夫？ 頭が痛いのか？」

「……うん、大丈夫」

心配する母親を安心させるように笑みを浮かべ、こんがりと焼けた

トーストを取っ取り出した。

「本当に大丈夫？ お医者さんには行ってる？ もしかして、また……？」

「大丈夫。先生のところには行ってるし、体も鍛えるようになってから丈夫になったんだよ？」

それでもまだ不安そうな表情を消せない母親だったが、しぶしぶ納得したらしい。

「……そうよね。亮くんも子供じゃないものね。今日だって走ってたもんね……」

「ほら、それより仕事の方は大丈夫なの？」

「あっ……！」

慌てて母親は朝食を食べ始めたのだった。

母親をさっさと送り出してから、亮は自室のベッドにダイブした。

頭が酷く痛む。

『The World』を止めるなんて考えたこともなかった。

両親とも亮がプレイしているネットゲームのことを詳しく知らないし、亮がプレイしていることを快く思っていない。

だが、そんなことで止めるわけにはいかない。

頭が酷く痛む。

片手で顔を覆い、ひたすら頭痛に耐える。

指の隙間から虚ろな、焦点の合っていない目が覗いた。

「俺は……誰だ？」

しかし唐突に瞳が収縮し、亮は体を起こした。

「メール……誰から……？」

のろのろとした動きでパソコンの電源をつけ、デスクトップを開く。

受信メールは1件。

差出人はアトリだった。

第20話（後書き）

かなり遅くなっていました。

どうも立て込んでしまい……。忘れたわけではなかったんですが。

ようやく投稿しても、短いし結局ほとんど進んでないし……。

一か月に1度が目標でしたが、達成できそうにありません。

第21話（前書き）

まずはこの度の震災で亡くなった方のご冥福をお祈りします。

幸いにも私の家族、親戚は無事でした。こちらの被害といえば物の落下と停電くらい。東北に住む祖父母も怪我はなく、電話が通じて無事が確認できたときは本当に嬉しかったです。

私に出来ることは限られています。ですが、出来る限りのことは協力していくつもりです。

第21話

「うざいんだよ！」

今までよく我慢していたと思う。

決してハセヲは我慢強い方ではない。

それがよく、数十分も耐えられたものだ三崎亮とハセヲは他人事のように考えた。

…… 実際他人事だった。

三崎亮 ハセヲ
ハセヲと三崎亮は同一人物であり、別人なのだから。

アトリに「冒険しよう」と誘われた。

だが内容はハセヲが望むような経験値稼ぎではなく、『月の樹』の理念を一方的に語るだけ。

自らの理念を持ち、語るのは別に構わない。

だがこちらの価値観を無視し、押し付け、勝手に同志と思い込む。それが非常に耐えられない。

志乃と同じPCタイプで、志乃とは別のことを語るなんて……！

腹立たしくなり、亮は^{ハセヲ}M2Dをむしり取った。

亮にとって自分の価値観を否定されることは自分の存在を否定されることと等しい。

アトリに悪気がない。だから腹が立つ。

他人の言葉をそのまま話すだけの、中身のない虚ろのくせに……！

白い、自室の天井を見上げ、亮は乾いた笑いを漏らした。

「はは、は……空っぽなのは俺も同じじゃないか……」

ソロで潜ることを選択したダンジョンは今のハセヲより高いレベルに設定されている。

ソロでダンジョンに挑むときの鉄則は、囲まれないこと。

必ず1対1の状況に持ち込んで、連続で攻撃を決めていく。マク・アヌで買い込んだ回復アイテムを早めに使用し、時間をかけてモンスターを倒していく。

「ふう……」

モンスターが消滅したのを見届け、双剣を消す。

肌にちくりと、小さな棘が刺さるような感覚。

ハセヲは足を止め、振り返った。

「……何か用か？」

ゆっくりとハセヲは振り返った。

そこに立っていたのは、ガラの悪そうな男2人。

プレイヤーキラー
PK。

「うほっ w 強気じゃん」

「その強がりがどこまで持つか、楽しみじゃねw」

ハセヲ
三崎亮は上唇を舐める。

「丁度いいや。俺は今、機嫌が悪いんだよ」

このときのハセヲは相手とのレベル差をまったく考えていなかった。それを知ってか、PK2人組がニヤニヤ笑いを浮かべる。

「へー、ヤル気かよ」

「簡単に殺されるなよ？ 断末魔の叫びを聞くのが楽しみなんだからさw」

「どつちが」

ハセヲも双剣を構える。

ひどく興奮しているのが自分でも分かる。

どこかで耳鳴りのような、耳障りな音が聞こえたような気がしたがそれも遠い。

三崎亮としての感覚が消え、ハセヲの感覚が上書きされていき――。

「ちょーっと待ったー！！！」

唐突に現実に戻された。

PKの背後に赤い和風の服を着た重槍士が立っている。

「クリーム……」

ハセヲの呟きを聞き、クリームが気安げに手を上げた。

「クリーム……？ あの『赤い稲妻』の、か？」

「くそつ、何でこんな所にいるんだよ」

クリームの登場に、PK2人は明らかに怖気づいていた。

『赤い稲妻』クリーム。

R：1からの古参プレイヤーで、正義感の強いことで有名だ。PK
行為を見つけて放ってはおけないタイプなのだろう。

「んで、どうすんだ？ 俺が相手になるぜ」

PKたちは顔を見合わせ……どちらかが転送アイテム『導きの羽』
を使用した。

あっという間に2人の姿が消える。

「……んで、どうしたんだよハセヲ。その姿は」

「うつせえっ！」

八つ当たりで、ハセヲはクリームに切りかかった。

第22話（前書き）

遊戯王5d・sが完結してしまいました……。。

第22話

結果は当然の如くハセヲの負け。というより勝負にすらなっていない。

クリムはログイン時間こそそれほどないとはいえ、2年もかけてレベルを上げた実績がある。

対してハセヲはデータドレインによりレベル1にされ、ようやく15を超えたくらい。

負けるに決まってる。

獣神殿の宝箱を開け、鼻を鳴らす。

「……しっかし、データドレインねえ」

「お陰で8カ月が水の泡w それに……」

「それに？」

「……いや、何でもねーよ」

闘宮のことを言ったらどんなちよっかいを出されるか分かったもんじゃない。

「お前さ、次いつ暇？」

「イギリスだっけ？」

クリムは商社マンとして世界中を飛び回っている。ここ数週間ログインがなかったのも外国への出張で、だ。

確か今回の行先は……イギリスだったはず。

そして律儀なのか、海外に出張に行くとよく土産を買ってくるのだ。

「ああ。土産に紅茶買って来たからよ」

「……別にいつでも。どうせ今夏休みだし、病院には毎日行ってるし。っつーかわざわざ土産なんていらねーよ」

「……そっか。志乃、だっけ？」

クリームが気まずそうに視線を逸らす。

「ああ。志乃はまだ戻って来ない。だから俺は……」

「三爪痕トライエツジを探すってわけか。……しかし、まどろっこしくねえか

？ お前なら……」

「これは俺ハセヲの問題だ。俺三崎亮は関係ない」

「……悪かった」

クリームは大人しく両手を上げる。

クリームは現実リアルと仮想ゲームを区別している。

だが反対にハセヲは区別をしていない。

しかし、『三崎亮』と『ハセヲ』は区別している。

だからこそ、クリームは不安なのだ。

「……だけだよ、お前はガキなんだから大人の力を頼れってんだ」

「ガキじゃねえよ」

「17は充分ガキだ」

「そりゃ、あんたから見れば誰でもガキだよな、オッサン」

「るせつ！ これでもまだまだ若いって言われてるんだぞ！」

思わずクリームは喚いて、ハセヲの頭を小突いた。

「って」

カナードの@ホームに戻ると、何故かアトリがいた。

「……………どうということだ？」

仲良し気に談笑しているシラバスとガスパーを見る。

「アトリちゃん、『カナード』に入るんだって」

「榊さんに相談したら、ハセヲさんの身近にいてあげなさいって……

……。だから私、頑張ります！」

「何をだよ……………」

「お2人から聞きました！ ハセヲさん、アリーナに参加するんですよね？ アリーナは『月の樹』でも認められています！ 私も出来る限りハセヲさんをサポートしますから！」

何故、こうなったのだろう……………。

ハセヲは無言で頭を抱えた。

第22話（後書き）

番組の変わり目ですね。遊戯王は初期からのファンで、シリーズが完結するたびに悲しくなります。そして次の主人公に期待というか、シヨックというか……。

遊星も最初は髪型見て「何なんだ〜!？」と思ったんですが、今では大のお気に入りキャラに。

でも次の主人公は……!?

とまあ、hackとは全然関係ない話です。

春休みということで比較的早い更新。この連載を開始させたときは1、2週間に1回のペースを目指していたのに……!

高校野球を楽しみながら、次話を書くことにします。

第23話

シラバス、ガスパーと出会ってからハセヲのペースは乱れっぱなしだ。

今だってアリーナには1人で参加しようとしたはずなのに、何故かシラバスとアトリが待ち構えていた。

（こいつら、ずっと張り込んでたのか……？）

今は夏休みだし、ログインする時間もある程度決まっている。待ち伏せは可能だろうが……。

どうでもいいが、このチームのネーミングセンスは如何なものだろう。

名前を勝手に登録したシラバスとアトリを恨む。

チーム名「ハセヲチーム」なんて、そのまますぎるしダサいだろ
う！

そんなハセヲの突っ込みも、試合前の2人の緊張の前には意味がなかったらしい。

初試合にアトリは緊張しっぱなしで回復や補助のタイミングがずれている。まあ、アトリ今まで戦闘らしい戦闘をほとんどしてこなかったらしいので、これは当然のことだ。

最悪の場合、アトリを幽に使うことも考慮していたのだが、その必要はなかった。

やはり初心者は初心者と組ませるらしく、相手のレベルはシラバスと同じくらいだった。

シラバスはレベルが低い割には引き際というものを心得ている。これは恐らくPKに襲われたときの対処なのだろう。意外にも善戦し、楽勝とも言えるくらいの試合結果だった。

「やりましたね、ハセヲさん！」

「あのなあ……あの程度の雑魚で喜んでどうする」

本来ならもつと数をこなしてランクを上げたいところなのだが、まずは初試合初勝利ということで引き上げることにした。

もちろんハセヲはこの後レベル上げのためにログインし続けるつもりだ。

選手専用の転送ゲートからルミナ・クロスに出て、ハセヲは溜め息をつく。

「でも私、勝ったのが初めてで……」

「……そういえばお前、レベル低いもんな」

アトリはあまりレベルの高くないこのメンバーの中でも断トツにが低い。レベルでいうならガスパーの方が高い。

しかもアトリは、この前の冒険で分かったのだがモンスターを倒そうとしないどころかラッキーアニマルさえ蹴ろうとしない。これでは経験値が稼げるわけがないのだ。

さらにアトリに言葉を続けようとして……ハセヲは転送ゲートの前で待ち構えていた1人の男性PCに目を留めた。

「……太白、どうしてここに」

「私とて、紅魔宮のチャンピオンシップは見ていた。その後、君を見かけたのだね」

「……つけてたのかよ」

「まさか。エンデュランスが本来とは違う場所から出入りしているのは知っている。君のことだから、エンデュランスともめたのだろう?」

流石、お見通しらしい。

「ハ、ハセヲお……」

「この人と……知り合いなの?」

ガスパーとシラバスが恐る恐る聞く。

この2人は目の前のプレイヤーが誰か知っているらしい。

闘宮^{アリーナ}にある3つのランクのうち最上級である『竜賢宮』のチャンピオン、太白。

「……森の住人、といや分かるか?」

「森の住人……?」

アトリが首を傾げる。

「森の住人っていうのはね、以前あったソロ専用のクエストに挑戦したプレイヤーのことなんだよ」

「クリアできたのは極僅かなんだぞう……」

ハセヲは黙ってシラバスとアトリのパーティを解散させた。

「……お前ら、先帰れ」

「え?」

「俺はこいつと話がある」

何せチャンピオンの1人である太白がアリーナの前にいるのだ。しかも相手は『死の恐怖』ハセヲ。注目を集めないわけがない。

ハセヲが促すと、太白はアリーナの裏へと歩いていった。

誰も人がいないことを目視とマップで確認してから、ハセヲは太白を見上げた。

「ってことは、俺がアリーナに参加するってこと気付いてて何も言わなかったのかよ」

「その話を、あの場所で持ち出してほしいか？」

「……イイエ、アリガトウゴザイマス」

棒読みで礼を述べる。

太白とは現実世界で7年前からの付き合いだ。

太白の本名は黒貝敬介。専門外の分野でありながら、研修医のときに亮リハビリを担当したときの縁で主治医となってくれた脳外科医。

ハセヲは顔を伏せ、息を吐く。

1 拍置いてから、顔を上げた。

「……で、何の用ですか？」

“ハセヲ”としてはほとんど使用しない、丁寧語で太白に聞く。

「エンデュランスについて、だ」

無言でハセヲは空を仰ぐ。

ルミナ・クロスは常に夜で、ネオンの明かりが眩しい。

「……エンデュランスにチートの技術はない」

「誰かが提供している、ということか？」

「ま、そうとってもらって構いませんけど……誰か、は聞かないでください。あの人、引き籠りなんで現実では誰とも会ってないんですけど」

「……つまり、この『The World』で？」

「ま、その力も奪ってやるけどな」

ハセヲが太白の顔を覗き込むように見上げる。

“ハセヲ”は笑っていた。

それを見て、太白は背筋に寒気を覚える。

恐怖。

生物が誕生した瞬間から死ぬまで抱き続けている、『死』に対する感情。

このハセヲは『死』そのもの。

だがあっさりと、“ハセヲ”は笑みを引っ込めて太白から距離を取った。

「そーいうことだから、アンタは黙って観戦してな。……あ、勢い余って未帰還者が増えちまったら、フォロ―頼むわ」

「……それは、」

太白が声を絞り出したときには、既にハセヲはログアウトしてしまった。

第24話

『イコロ』というギルドがある。

アリーナ闘宮の3つのランク、紅魔宮、碧聖宮、竜賢宮のチャンピオンのみが所属できるギルドだ。

そのイコロの@ホームに立ち入りを許されているのは限られた者しかない。

その限られた者の1人、PC名「大火」は@ホームに用意された個室のうち、竜賢宮のチャンピオン専用の個室を訪れた。

「よう」

「……あなたか」

大火はかつてのチャンピオンだ。だが大火を倒す挑戦者が現れず、自ら位を譲っている。

『イコロ』を創設したのも大火だ。

「おめえ、あの小僧と知り合いなのか？」

「小僧……？」

「ハセヲっていう、ガキだよ」

「……ああ、彼ですか」

ガキという単語は彼には禁句だ、と思いながら太白は答える。

「彼も、森の住人ですよ」

「にしちゃあ、親しげじゃねえか？」

大火が今は亡き友『フィロ』から聞いた話と、太白と話していたハセヲの態度は全然違う。

何を話していたかまでは分からないが、そこまで険悪そうには見えなかった。

それが大火には意外だった。

「そう、見えましたか？」

「おう」

それに黒貝敬介太白は笑みを浮かべた。

あの時の彼は、『ハセラ死の恐怖』ではなく主治医太白と接している患者三崎亮だったのだから。

「……彼のことをもつと知りたいなら、直接話さないと無理だと思いますよ」

7年来の付き合いである黒貝敬介本人も、未だ彼については分からないことが多いのだが。

「というわけで、オレがテメエの師匠になつてやる」

「何がというわけなんだよ！」

今日もまたアリーナに参戦していたハセラは、突然現れた天狗のようなプレイヤーの言葉に思わず突っ込んだ。

誰だっで見知らぬPCからの第一声がこれだったら突っ込みたくなると信じている。

「デメエは分かってない。アリーナの戦い方と、フィールドでのモンスターとの戦い方は全然違う！」

PKを相手にしていたのにどこかアリーナでの戦いがぎこちないのは、今までハセヲが圧倒的なレベル差でPKを薙ぎ払っていたからだろう。

『死の恐怖』の名は伊達ではないということだ。

PK100人斬りをしたという実力は、今はバグのせいかレベルが下がってしまったとはいえ健在。

レベル差があるにも関わらずそれを物怖じせずに、それを簡単にひっくり返して順調にランクを上げている。

「だから、戦い方を教えてやるってんだ！……っておい！」
ハセヲは早々に見切りをつけ、この押しかけ師匠……大火を無視してNPCの受付嬢に次のバトルの申し込みをすることにした。

第25話

小学生の頃、亮は浮いていた。

早熟だったためか、クラスメートたちと校庭でドッジボールやキックベースといった遊びをする気になれなかったのだ。

学校で遊ぶより『The World』が重要で、放課後はすぐ家に帰ってパソコンと向き合っていた。

そのため小学校では内向的と思われ、中学、高校でも積極的に誰かと関わろうとは思わなかった。

もちろん話しかければきちんと応対するし、行事にもそれなりに参加した。

今でこそネット中毒者と呼ばれているが、それだけだ。
ジャンキー

つまり、亮はいじめというものに関わっていない。

他人からどう思われようが気にしないし、他者に必要以上に干渉しようとはしない。

「うわあああん、クーンさーん！」

だから、ガスパーがクーンに泣きついてても、どうすればいいのかわからなかった。

きっかけは、ハセヲが紅魔宮に参戦を決めたから。

ハセヲが『カナード』のギルマスを務めているため、カナードの開いているショップで売り子をしているガスパーが、ケストレルに所属するボルドーの仲間にいびられるようになったのだ。

これがハセヲなら一歩たりとも引かず、楚良であれば闇討ちをしていたであろう。

だが標的はガスパーだった。

心優しいガスパーは、ハセヲに相談せずずっと耐えていたのだ。

でも元ギルマスであり、カナードの創立者であるクーンを見たとき、限界が来た。

ガスパーは、ハセヲではなくクーンを選んだのだ。

そもそもハセヲはつい最近カナードに入っただけで、2人と知り合ったのもここ一週間ほどのこと。

付き合いの長さなら、クーンの方が長いに決まっている。

それでも、ショックだった。

そしてそう感じた自分に驚いた。

「……お前、何で『カナード』辞めたんだよ」
ハセヲに攻めるつもりはない。

でも、面倒見の良さそうなクーンがわざわざギルドを抜けてまでしなければならぬことがある。
それが何なのか、ハセヲは知っている。

「……もしかして、AIDAの事件に巻き込まないようにするためか？」

「……ああ、そうだ」
それをクーンは肯定した。

クーンが守ろうとしたものを、ハセヲは壊しかけている。

「……くそっ」

元々、ハセヲにギルドマスターをやるつもりはない。ただ押し付けられただけ。

そこまで愛着のないギルドの悩みを解決してやるほど、ハセヲは人好しではない。

しかし、かといって泣いていたガスパーを放っておけるほど、他人に無関心ではいられなかった。

「……こんなん、俺のガラじゃねえのによ」
ハセヲ

そして、自分の心理状態を認識できるくらい、亮^{ハセヲ}は冷静だった。

やられたらやりかえせばいい、というのがハセヲの認識。

だが今回標的となっているのはハセヲではなくガスパー。例えハセヲが仕返しをしても、その分ガスパーに跳ね返ってくるだろう。

そのときガスパーが耐えられるか……答えは否。

ケストレルによる干渉を止めさせるためにはどうすればいいのだろう。

「……何だよ」

見ると、クーンがニヤニヤとハセヲを見て笑っていた。

「……いや、案外ハセヲって面倒見いいんだなって」
「誰がだ！」

「だって、何とかしようとしてくれてるんだろ？」

「別に、そんなんじゃないよ」

「またまた」

やけに気安く、クーンはハセヲの首に腕を回す。

「とりあえず、少し付き合ってくんね？」

そう言って渡されたのは、ギルドキーだった。

第26話

職業を錬装士マルチウエボンにしているプレイヤーにとっては待ちに待ったクエスト「ジョブエクステンド」が始まった。

このイベントは定期的に行われていて、クリアするとキャラクターエディットのときに設定したワンランク上の武器を使用可能になるのだ。

ハセヲの初期武器は双剣、セカンドに大剣、サードでは大鎌を設定していた。

つまり、このクエストをクリアできれば大剣が使えるようになり、ハセヲの戦い方の幅が増えるのだ。

戦闘中に武器を持ちかえられるのが、錬装士の強みなのだから。

実を言うと、ハセヲはジョブエクステンドを経験したことがない。以前、ソロプレイヤー専用クエスト「痛みの森」の報酬で、ジョブエクステンドを経ずに全ての武器を使用可能になったのだから。

そういえば、同じ「森の住民」の知り合いに三郎というプレイヤーがいるのだが……彼女彼は今どうしているのだろう。

大剣・大百足を握るのも久しぶりな気がする。
たった1週間と少しだけのはずなのに。

「少しは男前が上がったじゃねえか……」
「あんた……」

ハセヲは1人でこのクエストをクリアした。

そもそもこのクエストは錬装士専用のクエストで、他の人を誘えない。とはいえ、もし誘えたとしてもハセヲは誰も誘わなかっただろう。

ガスパーはケストレルとの争いでログインをしたがらないし、シラバスもそんなガスパーを慰めるために忙しいからだ。

アトリもログインしていなかったし、かといってクーンやパイを誘うほど親しくない。

最近メールアドレスを交換したひろし3は……色んな意味で会いたくない。

結果的に1人でも問題なくクリアできたし、レベルも上がった。現在のレベルは22。

いよいよ、明日は闘宮でボルドーと戦う。

ケストレルのギルドマスター“がび”との直接交渉により、ハセヲがボルドーに勝てばカナードへのちよっかいを禁止してくれるとの確約を得た。

それを抜きにしても勝たなければいけない試合。

「何で俺に色々教えてくれるんだ……？」

それにしても……この押しかけ師匠は何がしたいのか、未だに分からない。

「ただの気まぐれだよw かつかつか！」

そのまま大火は転送されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9098h/>

.hack//G.U. Another World

2012年1月12日18時57分発行